ひたすら、読んだ。

樋口ミユ

　文字数に限りがあるなら、それぞれの作品の心に残ったことを記そうと思う。

●『どこよりも遠く、どこでもあった場所。あるいは、どこよりも近く、なにもない。』FO ペレイラ宏一朗

　見ないようにしてきた全てのこと、中途半端な自分、「しゃあない」と見過ごしてきたあらゆることを書き続けてやっと「終わり」まで辿りつく。けれど終わらせて良かったのか、終わらせないほうが良かったのか、未来と過去、後悔と解放入り混じる。これはまだ人生の途中なんだ、と見守る大家の存在がそう思わせてくれる。『ガラスの動物園』よりも遠く、『ガラスの動物園』でもあった。

●『サッカバカナ』田中浩之

　鮮烈なシーンがたくさんあるなかで、一番印象に残ったのはスケートリンクの夢の話。本当に恐ろしいものは簡単に正体を見せてはくれない。でもうっすらとその正体の目星をつけていて、思ったとおりだったら自分はどうなってしまうんだろう。夢ではまだ見ぬ恐怖に付きまとわれ、現実では、自分では真っ当だと思っているのに突如「それ違う」と言われ、ではどうすればと周りを見ると、自分にとっての「それ違う」ことに取り囲まれ呆然と立ち尽くす。自分にも、世界にも、抗って生きている。

●『さらば、わがまち』棚瀬美幸

　誰もが必ず死を迎える実現性、それを共通のドラマと考え、個人それぞれで起こる蓋然性、それを個別のドラマと考えた時、二つのドラマをあわせて人生と呼んでみる。二つのドラマが終わりを迎える時、この本は大きな広がりを見せる。肉体（を、 町と呼んでもいいかもしれない）に閉じ込められた精神が解放され、作品を最も広く高くする瞬間の言葉が、ワイルダーの『わが町』からの引用であることが作品全体を強いものにはするが、その言葉こそ劇作家として向き合うところではなかっただろうか。

●『Delete』中川真一

　女の子であるがゆえに実母にも義父にも利用され、弟は逃れた。最も弱いものにしわ寄せがきて逃れられない現実。貧困の実態、教育が行き届いていない事実を見ようとする姿勢が自分の問題として作者のなかにあるから、逃げる術を持たない子供が唯一できた”なかったこと“にするという性格特性に共鳴したのだと思う。自らの記憶を消去してきたサトミが、他者の存在（肉体も含めて）をなかったことになどできないという事実を目の前にした時、なにを思うのか。実際の事件を扱うからこそ、事実、その向こう側を描くこと

ができればと思う。

●『かえりみちの木』中村ケンシ
　都会から、経済から、支配から、人間から、自分から、あらゆるものから逃れて大樹の下で足を止める。そこは避難所なのだ。避難所では通常の人間関係を少し飛ばして多くのことを語ってしまう。語らずにはいられなくなる。セリフの「トゥビィコンティニュー」の言葉通りに、生きることは死ぬまで続く。生きるために競争ではなく共存を選ぶという作者の願い。とても抽象的な言い方だけれど、登場人物そのものが走り出さなかった。強い思いと祈りのような作者自身の言葉が、登場人物に自由を許さなかったように感じた。

●『ねこすもす』魔人ハンターミツルギ
　なにが始まるんだろうと先の読めないオープニングの面白さ。説明しようがない状況がひとところに一緒くたに置かれている妙なおかしさはなんだろうかと考えた時、分かるように分けて説明しない不条理があるのだと思った。観劇でこぼれ落ちてしまうお客さんを作らない工夫でもあるファンタジー（非現実）から、お客さんを前のめりにしてみるシュール（超現実）を試みることが、本当は可能な作家なのではないかと思っている。

●『ラスト・ナイト・エンド・ファースト・モーニング』山崎彬
　「私」とは記憶の総和。顕在意識に引っ張りだしたものだけを記憶と認識するが、忘れてしまったことはなくなったわけではなく、引っ張り出されない奥底で確実に「私」を作っている。けれどデジタルタトゥは過去も現在も並列に並べてしまう。渦中の朝子が傍観者（フォロアー）真人に、知らないから一番よく話をするというやりとりはやけにリアルに感じて、生身の接触のない関係というものが存在するのだと思った。次から次へと謎が解ける展開が面白いはずなのに、なぜか全貌が見えてくると膨らんだ読み手の想像力を小さくしてしまう。その一番の理由は、父・潤が大事な復讐を他人の手に委ねたことだったと思う。

●『しずかミラクル』山本正典
　名付けから始まる。一番はじめに「私」と「あなた」を分ける記号。分かれたらすぐさま歪みが生まれるのに気がつかず、いつまでもこの日常が続くと楽観的に脳が思い込む。だから生きている間はいつもタイミングを見誤る。次の世代に何かを残したいと本能的にも意識的にも思うくせにエゴイズムによって歪んで生きている姿は滑稽。人間の有様を批判しながら、愛している。最も楽しく、ノって書いてしまったところこそ、もしかしたら蛇足なのかもしれない。

●『逢いにいくの、雨だけど』横山拓也

　グラウンドに、見えるはずのない１９９１年が浮かびあがるのだろうと想像する。やり直せない１９９１年と今、現在進行形。その両方の時代に関わってくる人間たちの小さなずれ、というよりかは、埋まらないほんの少しの隙間こそが人間関係というものを浮かび上がらせてくれる。自分の常識と、伴侶、家族、友人といえども他者の常識、そして全てを取り巻く大きな社会の常識。これらの違いがぶつかってうまくいかない。人は自分の感覚を正しいと思いたい。それが登場人物の数だけぶつかり合う。ショッキングな事柄を中心に置いて物語を展開することより、このささやかなぶつかり合いこそが、いつしか本当の大きな渦を作ることが出来るはずだと思っている。

　ひたすら読むこと。作家が書いた時の熱量と神経を辿るように何度も何度も読むことが、戯曲を理解し、味わい、解釈し、最も大切なことを見つけだせるのだと信じるけれど読み落としてしまった全てに自戒する。最終候補者たちに愛と敬意を持って。